

JUGEND PHIL IN FUKUSHIMA 2019

ごあいさつ

本日は、ユーгент・フィルハーモニカー第3回福島公演にご来場くださりまして、誠にありがとうございます。

日本は世界有数のアマチュアオーケストラ大国と言われています。1000以上も存在する団体の中で、ユーгент・フィルがどのように独自の活動を展開するのは大変難しい挑戦ですが、「オーケストラが社会にどのように貢献できるのかを模索する」という当団の理念に基づき、様々な活動の可能性を検討してきました。2017年に第1回を開催した福島公演は、被災地を応援したいという着想から始まり、温かいお客様の声を受けながら内容の充実と深化を図ってまいりました。今回の地元高校オーケストラ部・弦楽合奏部有志の皆様との共演が、参加の皆様、そしてお客様にとって素晴らしいひとときとなることを願ってやみません。

さて本日は、ベートーヴェン、ドヴォルザークによる2曲の交響曲、そして高校生有志の皆様との共演でチャイコフスキーの荘厳序曲《1812年》をお届けします。どの曲も大変人気が高く、演奏機会の多い作品ですが、ユーгент・フィルらしい個性の光る演奏を目指して鋭意練習を重ねてきました。どうかお楽しみいただければ幸いです。

最後になりましたが、本演奏会の開催にあたりご協力いただきました地元福島の多くの皆様、そしてご来場いただきました皆様に心より御礼を申し上げます。

ユーгент・フィルハーモニカー 代表 湯田 怜央奈

プログラム

ベートーヴェン：交響曲第7番

— 休 憩 —

ドヴォルザーク：交響曲第8番

— 休 憩 —

チャイコフスキー：荘厳序曲《1812年》

福島県内高校オーケストラ部・弦楽合奏部有志との合同演奏

指揮 = 安齋拓志

演奏中は携帯電話の電源をお切りください。

他のお客様のご迷惑となりますので、演奏中のお席の移動はご遠慮ください。



〈指揮〉 安齋拓志（当団音楽監督）

福島県二本松市出身。3歳よりピアノを故大内洋子氏に師事。福島県立福島高等学校管弦楽団でヴァイオリンを始め、これまでに木全利行、篠崎史紀の両氏らに師事。全日本高等学校選抜オーケストラ・ヨーロッパ公演に3年連続で参加。立教大学交響楽団においてコンサートマスターを務める傍ら、故佐藤功太郎氏の勧めで指揮活動始める。故小松一彦、河地良智、橘直貴、田中一嘉、時任康文、海老原光の各氏らのアシスタントコンダクターを務め研鑽を積む。卒業後は桐朋学園大学、国内外のセミナーにおいて学び、これまでに指揮を故佐藤功太郎、河地良智、秋山和慶、黒岩英臣、湯浅勇治の各氏らに師事。2006年にユージェント・フィルハーモニカーを創設。2012・2013年にはアイドルグループ嵐のコンサート「アラフェス」のオーケストラと合唱を指揮するなど、クラシックの枠にとらわれない様々な活動を展開している。



ユージェント・フィルハーモニカー

Jugend Philharmoniker（ユージェント・フィルハーモニカー）は、一般財団法人日本青年館の音楽行事（全国高等学校選抜オーケストラフェスタ、全日本高等学校選抜オーケストラ・ヨーロッパ公演、日本ユングオーケストラ・ヨーロッパ公演）に参加したメンバーが中心となって2006年3月に創設されたオーケストラである。全国各地の様々な高校や大学オーケストラ出身のプレイヤー約80名が集まり、東京を拠点として活動している。3月の定期演奏会を中心に、福祉施設や普段生のオーケストラに触れる機会の少ない農村への訪問演奏、その他、行楽施設の各種イベントやテレビ番組での依頼演奏など幅広い活動を行っている。音楽的に、そして人間的に成熟した団体作りに励みながら、「アマチュア・オケだからできること（≒プロオケには出来ないこと）」を追求している。

* ユージェント・フィルハーモニカーでは学校・老人ホームなどの福祉施設や、その他各種イベントなどでの依頼演奏を受け付けています。詳しくは当団Webサイトをご覧ください。

曲紹介

ベートーヴェン：交響曲第7番

今日ではすっかりクラシック音楽のアイコン的存在となった交響曲。ワーグナーに「舞踏の聖化」と称され、各楽章が固有のリズムテーマに動機づけられています。日本の舞踊では人間に主体があり、要処で鼓が鳴ることでその統制を取る一方、西洋の舞踏とは主体があくまで音楽にあり、厳格なリズム支配の下で人間が踊らされます。前作の《運命》《田園》を通じリベラルな表現を实践したベートーヴェンが回帰したのは、この極めて制約的な音楽の世界でしたが、抑え切れぬ激情はその枠を遥かに越えて現れます。

第1楽章 Poco sostenuto - Vivace

歓喜の予感を漂わせる長い序奏の後、お馴染みの主題部に入ります。今の高校生は「のだめ」と聞いてもあまりピンとこないようでびっくりしました。

第2楽章 Allegretto

全楽章の中では一番遅いテンポですが、Allegretto(少し速く)と緩徐楽章としてはやや攻め気。執拗に繰り返されるテーマが印象的で、山王戦では三井もしつこいスッポンディフェンスに苦しめられました。

第3楽章 Presto

速い3拍子のスケルツォ。ネタが尽きたのか創作に飽きたのか、突如投げやりのように終わります。トランペットのロングトーンが見せ所ですが、B'zの稲葉は肺活量が約8,000cc(成人男性平均のおよそ2倍)もあるそうです。

第4楽章 Allegro con brio

疾風怒濤のフィナーレ。「ミスター・エイトビート」こと元BOØWYの高橋まことは福島高校の大先輩です。

終盤の不快な低弦のオスティナートは、難聴のベートーヴェンに絶えず聴こえていた轟音の耳鳴りと言われています。しかしその苦難は圧倒的な狂喜に押し退けられ、乱舞のうちに曲を終えます。

作曲当時のベートーヴェンは、後に「不滅の恋人」と呼ばれる人生最愛の女性と出会い、相思相愛を实らせた絶頂期にありました。大恋愛の喜びを綴った日記とも言えるこの第7交響曲が完成されたのは5月。恋人とチェコの温泉地へ最初で最後となる秘密の旅行へ出かけ、投函されることのなかった恋文を書きしたためたのは7月。それはちょうど1812年のことでした。

偉人が惚気けきっている頃、北国では死闘が繰り広げられているわけですが、その日記はまた演奏会の最後にお披露目するとして、次はベートーヴェンの淡い思い出の地、チェコの音楽をお聴き入れいただきます。 (伊藤雅也)

ドヴォルザーク：交響曲第8番

ドヴォルザークと言えば、アマチュア・オーケストラ（アマオケ）の人間にとって最も親しみの深い作曲家の1人に挙げられる。彼の代表作である交響曲第9番《新世界より》は2010年代アマオケに演奏される機会が多い曲ランキング第1位に輝いているし、今回演奏する交響曲第8番も同ランキング第5位になっている（※amabileより）。

ドヴォルザークの音楽が何故それ程の親しみやすさを持っているか、それは彼の描く「旋律」によるものだろう。彼はチェコの出身であり、彼の音楽にはチェコ土着の民謡や舞踊の旋律やリズムが引用されている。更に、指揮者である尾高忠明氏曰く「チェコ人と日本人は音楽観が通じる場所があり、チェコの和音や旋律は日本人にはすんなり入ってくる」とのこと。交響曲第9番の第2楽章に「遠き山に陽は落ちて…」と歌詞が付けられているように、日本人が彼の曲に懐かしさを覚えるのも納得である。

さて、そろそろこの「ドボ8」の曲紹介を始めよう。曲の冒頭、チェロによる郷愁漂う旋律が演奏された後、フルートが「鳥の主題」を演奏する。その何とも自由な鳴き声はオーケストラ全体へ伝播していき、喜びの爆発となる。第2楽章は自由な形式で作られており、こちらでも時折鳥の鳴き声らしき旋律が聞こえる。第3楽章はもの悲しい舞曲であるが、終盤突如として喜びの爆発が巻き起こるのも見所だ。その狂喜を引き継いだトランペットのファンファーレによって開始する第4楽章、希望と喜びに満ち溢れた楽章である。中間部、穏やかに演奏される旋律はまるで人生の思い出を回顧しているようだ。私自身、この部分を聴くと東北の地で過ごした輝かしい青春時代を思い出さずにはいられない。

今日、この福島でドヴォルザークを演奏出来る事を本当に嬉しく思う。東京を抜け出し、一年ぶりにここに戻ってきた私達の喜びの爆発を、是非聴いていただきたい。 (志藤 豪)

チャイコフスキー：莊嚴序曲《1812年》

チャイコフスキーは自己批判の強い作曲家であった。作品に対する厳しい姿勢は莊嚴序曲《1812年》に対しても例外ではなかった。何のインスピレーションも湧かないと周囲に嘆いていたチャイコフスキーの苦勞の痕跡がスコアには残されている。

たった15分程度の序曲の中には、彼の初めてのオペラ《地方長官》からの一節（自作から引用することは他の作曲家でもごく普通に見られる）のみならず、ロシア民謡《門の前で》、更にはロシア正教聖歌やフランス国歌《ラ・マルセイエーズ》とロシア帝国国歌《神よ、ツァーリを守り給え》まで登場する。そしてこの曲の特徴とも言える大砲を楽器として用いている。チャイコフスキーのオリジナルの旋律が少ないことに加え、似たような題材を持ち、国歌の引用や火器を楽器として用いるなど、数多くの共通点を持つベートーヴェンの《ウェリントンの勝利》がすでに存在することも無視できない。これらのことを踏まえると、チャイコフスキーが《1812年》に対して音楽的価値が低いと断じていたことも理解できる。

しかしながら、その一方で彼の優れた「文章力」には目を見張るものがある。起承転結が分かりやすく、かつ「騒々しいだけの何か」にならないように作られた構成、多くの引用を盛り込んで尚破綻しない対位的手法や旋律の配置、魅力的なオーケストレーション……。これら全てを同時に実現する「文章力」は、果たして誰にも持ちうるものなのか？その答えは明白である。初演こそ評判はあまり芳しくなかったが、その後の再演で人々を熱狂させることになるのは必然だと言えるだろう。

「インスピレーションは怠けている者には決してやってこないものだ。」チャイコフスキーが語ったこの言葉は実に印象的だ。自己批判的だったのは決して過去に満足せず、未来に最良の音楽を見出していたからだろう。西欧諸国の東方に対する拭い難い偏見を乗り越えてロシア音楽の価値を広めることに成功したのは、彼の強い精神、謙虚な姿勢と自尊心、何より音楽への真実の愛に他ならない。私たちが彼自身を理解して自分の糧に出来る心がある限り、これからもチャイコフスキーの作品はインスピレーションを得るヒントを私たちに授けてくれるのだろう。

（高木 捷）